

能楽雑感から その11

仕舞雑感

～ 仕舞雑感 「船橋(1)」 ～

今月27日(土)に、年に一度の師匠(谷村一太郎師)主催で、その弟子たちの発表会が渋谷のセルリアン能舞台で開催され、私は仕舞「船橋」を舞う予定です。

これまでの生涯、何度も能舞台を踏みましたが、「船橋」は初めです。

私にとって、数多くの仕舞の中で、難し過ぎて或いは舞を理解できなくて、これまで能舞台で舞うことを敬遠している曲(3曲)、挑戦しがいのある、且つ、出来ることなら何回でも舞台で舞って、玉成してみたい曲であるにも関わらず機会が得られない曲(数曲)、とがありますが、「船橋」は後者の範疇に入ります。

「船橋」は稽古をしてみて、予想した通り実に難しい曲であることが改めて分かりました。

謡も長くて難しいけれど、舞は更に難しく、舞台を一週間後に控えた今でも、頭を抱えています。

もっと、もっと、稽古を積んだら自ずから道が開けるとは思いますが、その時間も少なく、悩ましい限りです。

本曲は、曲趣としては、男女の情愛の絡んだ男性がシテの執心物ですから、「錦木」とか「女郎花」に似ていなくもありません。

後シテで使われる「面」は、「阿波男」、「怪士」、「邯鄲男」などで、この点では「錦木」と同様ですが、後者が、仕舞では「クセ」の部分で表現されているように、「船橋」の第三者に対する怒りではなく、「錦木」においては、思いを遂げられなかった相手の女性への「恨み、つらみ」が主題になっています。

一方、「女郎花」においては、面は通常「邯鄲男」を使うようですが、烏帽子を被っての登場ですから、それなりの気品を維持しなくてはなりません。シテは恋する女性が先だった故に後追い自殺をする訳ですから、恨みよりも「悲嘆」が先に立ちます。

対する「船橋」は、血気盛んな男女が、親の反対によって非業の死を遂げる訳ですから、執心の強さの度合いがこれら両曲とは各段に違います。ワキの山伏に対して、打杖を以って対峙することでも理解できるように「怒り」が主題で、勁い表現が必要になります。本曲に比べたら、「錦木」も「女郎花」も軟弱なキャラクターと言えます。

今日現在、そのようなシテの舞をどのように表現したらよいのか、まだ五里霧中でありませぬ。

～ 仕舞雑感 「船橋(2)」 ～

自分なりの仕舞を玉成させていくプロセスで、心掛けなくてはならないことがいくつかありますが、本曲においては、それが極めて多岐に亘っていて、それらが、舞そのものを難しいものにしていきます。

形付けは文字通り大雑把なものですし、師伝も限られたものですから、あくまでも自分自身で納得できる舞を作り上げていかなければなりません。

前回記したように、本曲の特徴は「靱さ」、それもあからさまに発散させる強さではなくて、

屈折した心情を表さなくてはならず、その辺りが難しくて、三日後に本番を控えているにも関わらず、どのように表現したらよいか迷っています。

以下は、こうしてみようと思いつきながら、まだ確信の持てないでいる処を率直に列挙してみます。

1. 謡での表現

本曲は、シテ謡がとりわけ長いので、無事に謡えるかどうかは先ず前提となりますですが、それ以外では、「回し」とか「振り」の角度に留意してみます。

2. ありきたりの形を疎かにしない

仕舞でよくある、「右受け」などはそれなりの注意が必要で、右受けしながら右腕をどの程度浮かせるかなどを考える必要があります。

本曲では、「岸に見えたる人影はそれか……、のところで3足詰めますが、この詰め足のタイミングとか緩急は検討のし甲斐があります。

3. 基本形をどのような形にするか

サシ込、開キ、サシなどの基本形は同じようであって、曲ごとに異なります。師匠からは「修羅物と同様に考えて下さい」と指導を受けましたが、それでは「直し」を入れるべきか否か……

4. 緩急（ためる）を心掛ける

「行合いの真近くなりゆく……、放せる板間を踏み外し、かっぱと落ちて……」の件では否が応でも「溜め」る一方で、「運ぶ」ことも必要であり、これを体で覚えるにはまだまだ時間が必要です。

5. 決め技を決めるための準備

謡の何処でどの形を決めるかが仕舞では大切ですが、形を決めるには、その前から準備が必要で、例えば謡いながら立ち上がるにしても、何処から踏み切るかは、曲種によって異なります。

本曲では、シテ謡「……船橋の……」で、ふなの「な」で踏切ることにより、「心の嬉しや……」の嬉しの「し」で「ユーケン」を決めるために、「心……」に入る前にその準備をしなくてはならないことなど、など。

「日暮れて道遠し」を実感していますが、こうだから飽きないで続けていられるのでしょうか。本番で、「跳び返り」をすべきかどうか、まだ、迷っております。

～ 仕舞雑感 「船橋」(3) ～

いよいよ、本番が明日に迫りました。この仕舞の形で、最もこだわっているのは、「跳び返り」（空中に跳びあがって、少なくとも180度回転して着地する形）です。

去年の、喜寿記念に「舍利」を舞い、ものの見事に「跳び返り」に失敗していることがトラウマになっているからです。

「船橋」では、川の兩岸にそれぞれ住んでいる若い男女が、深夜の逢瀬のために橋を渡って駆け寄りますが、これを良しとしない彼らの親が橋板を外して置いたために、お互いに駆け寄った途端に川中に落下して溺死するという筋書きで、「跳び返り」は橋を踏み外して落下するときの情景を表現します。

故に、跳ぶときの高さ（落差）も強調しなくてはならず、危険度が増します。

私より2歳年上の師匠は、自らも十年以上前から跳び返りを回避しておられて、それはそれなりに、観客に感銘を与える仕様を見せており、弟子にもこの形を勧めることはありません。依って、私も師匠に稽古を付けてもらう時には、一度もこれを演じたことはありません。

軸足となる右足は、かねてより膝に痛みを覚えていましたが、今日現在は小康を保っています。代わって、左膝の関節が急に痛み始め、階段を降りるときに激痛が走り、これが何らかの妨げになるのではないかと心配ではあります。

もう一つの心配ごとは、「跳び返り」のタイミングです。

本曲では「放せる板間をふみ外し」で、常座辺りから、正先近く間まで、長い助走をした後で、ノリ込み拍子をし、その直後に跳びますから、間合いの取り方が極めて難しく、これもまだ納得のいく境地にはなっていません。

「冒険無くして、人生と言えるか！」が信条ではありますが、さて本番でどうするか、まだ決めかねています。

(以下、投稿次第追加予定)

